

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 5章1～10節

1大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。2大祭司は、自分自身も弱さを身にまわっているのです。3また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。4また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。5同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、

「あなたはわたしの子、

わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。

6また、神は他の個所で、

「あなたこそ永遠に、

メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。

7キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。8キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。9そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、10神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 20章9～19節

9イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。10収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。11そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。12更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。13そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』15そして、

息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。16戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。17イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、  
これが隅の親石となった。』

18その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」19そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

### 主イエスの行かれる道【こども説教のために】

皆さんをお誘いしてきた「受難節（レント）」の「四十日の祈り」も、終わりが見えてきました。来週は「受難週」、主イエスが十字架につけられ、死んで葬られたことを記念する「聖なる一週間」です。主イエスのご復活を祝う「イースター（復活祭）」の前に、わたしたちは、どうしても「受難週」を通り抜けなければなりません。約二千年前、主イエスに従っていた弟子たちが通り抜けたように、です。

弟子たちは、主イエスが進み行かれようとしているところを、あらかじめお聞かせいただいていた。主イエスは弟子たちに、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」（ルカ 9:22）とお語りになっていました。弟子たちは確かに聞いていましたが、「なぜ」と問い、「何のために」と思い巡らしたことでしょう。「三日目に復活する」としても、そのために、どうして敢えて「苦しみを受け」たり、「殺され」たりしなければいけないのでしょうか。

そのときが迫りながら理解できずに悩む弟子たちに、主イエスは、一つのたとえをお語りになられました。「ぶどう園の主人」が「愛する息子」を自分の「ぶどう園」で「農夫」たちに殺されてしまう、というたとえです。弟子たちの教会は、主イエスがお語りくださったこのたとえを、「受難週」を通り抜けようとする者たちに、二千年間、繰り返し語り継いできました。このたとえを心に留めながら「受難週」を迎え、その先の「ご復活の祝い」に進み行くよう、この期節の歩み方を受け継いできたのです。

二千年前、一人の方が、十字架の上で死なれました。その方の行かれた道に従う者たちが現れました。今も、その道を受け継ぐ者たちがいるのです。

## 《ほかの人たち》へ

こどもたちと「受難節」をどのように過ごしたらよいか、奉仕者の皆さんと毎年頭を悩ませてきました。主イエスの「荒れ野の四十日」を記念する「四十日」を、わたしたち自身、どのように過ごしたらよいか、十分に分かっていないところがあるからです。この期節の過ごし方を、プロテスタント教会の多くが、各自の判断に任せきりにしてきた過去があるのです。辛うじて大切にされてきた「受難週」の営みさえ、近年は、多くの教会で縮小・中止されてきています。それでも、「イースター（復活祭）」の祝いの日には、この教会でも普段以上に礼拝堂が埋まるのです。

三年前、世界中の教会が「イースター」の祝いに集まることを取りやめました。徐々に祝いのために集まることを再開してきましたが、わたしたちの教会では、今年の「イースター」を区切りに、ひと時に皆が集まって祝うことを取り戻そうとしています。それは、確かに喜ばしいことです。

そうであればこそ、わたしたちは、なお一層、「受難節」の祈りを深めたいと思うのです。「受難週」に記念すべき主イエスの出来事を、しっかりと心に刻み直したいと思うのです。

昨年、主イエスの受難の出来事を演ずる大規模な「受難劇」が二年遅れで開催されたことが報じられました。約四百年前からドイツ・オーバーアマガウ村で十年ごとに村をあげて開催されてきた「受難劇」です。三年前の開催予定が延期になり、昨年の開催になったということでした。十年ごとに、5月から9月にかけて百回も上演される「受難劇」です。日本のテレビで紹介されて以来、有名になりました。皆さんの中にも、ドイツまで行って御覧になられた方がいらっしゃることでしょう。すっかり観光化してしまった趣がありますが、昨年の上演では40万人以上が観劇したというのですから、侮れません。何よりも、「受難物語」という、必ずしも心晴れるストーリーでもない大昔の出来事を描く物語が、関心を寄せ続けられているのです。

その「受難物語」を、わたしたちは、教会でどれほど聞く機会があるでしょうか。牧師の立場で言えば、実のところ、語ることをあまり好まれないのです。あの主イエスのような生き方を求められることが、キリスト者によってさえ必ずしも良しとされていない、ということなのでしょう。

「ぶどう園」のたとえを聞いた人々は驚いて「そんなことがあってはなりません」と反応したと、福音書は伝えています。主イエスの身にも、自分の身にも、そんなことは起こってほしくないのです。仲間に裏切られ、人々につるし上げられて、殺されるようなことが、あってはならない。そう思うのは当然でしょう。けれども、主イエスはたとえで語られました。「そのぶどう園は、ほかの人たちに与えられる」と。

## 人々のために神に仕える

「ぶどう園」を欲する者は、「ぶどう園」を得ることができない。主イエスは、そうおっしゃられるのです。いいえ、「ぶどう園」を得ることができなかったのは、「ぶどう園」を欲した者たちだけではありません。「主人」から遣わされた「僕」たちも、「主人」の「愛する息子」も、「ぶどう園」を得ることはなかったのです。「ぶどう園」は、「ほかの人たち」に与えられるのです。

まもなく「イースター」を迎えて主イエスのご復活を祝おうとしているわたしたちは、何を喜ぼうとしているのでしょうか。そのとき、何を得ようとしているのでしょうか。「神のぶどう園」でしょうか。「天の国」でしょうか。死後、「天国」に行くことでしょうか。「天国行きの切符」が欲しくて、イースターを祝おうとしているのでしょうか。主イエスが十字架で「天国行きの切符」の代金を払ってくださったから、主イエスを信じるのでしょうか。

むしろ、わたしたちが主イエスに倣うように教えられているのは、自分が得ることはなくても、ほかの人が得られるようにすることではなかったでしょうか。自分の愛する者はもちろん、たとえ敵対してくる相手であっても、ほかの人が、「神のぶどう園」を与えられること、「天の国」を見いだすことを願う者となることの幸いを、わたしたちは、主イエスから教えられてきたのではなかったでしょうか。「受難週」の主イエスの出来事の中から、繰り返し、示されてきたのではなかったでしょうか。

教会は、主イエスの祈りを、「大祭司の祈り」と呼んできました。「ヘブライ人への手紙」は、主イエスを「**自分自身も弱さを身にまとっている大祭司**」と呼んで、こう言うのです、「**キリストは…激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ**」られたのだ、と。その祈りが、ご自身の弱さや苦しみを取り除いてもらうためだけのものであったならば、主イエスは激しい叫び声をあげたり、涙を流したりすることまでなさる必要はなかったのです。けれども、主イエスは「大祭司」として、ほかの者たちのために祈られたのです。ご自分を弱さの中に留め、敢えて苦しみを引き受けられることによってしか為し得ない、ほかの者たちのための祈りを、願いを、主イエスは、ご自身の十字架に託されたのです。

それは、しかし、主イエスお一人で為されて完結したことではありません。「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい**」(ルカ 9:23)と、主イエスは弟子たちをお招きになりました。わたしたちをお招きくださっています。なぜなら、それは、決して絶望の道ではないからです。幸いな希望に至る道だからです。後の者に受け継がせる価値のある、人としての生き方だからです。この生き方を受け継いだ者だけが、後の者にこれを受け継がせることができるでしょう。